

# 110周年を迎えて

～愛知淑徳を支えるキーワード～

お蔭さまで、愛知淑徳学園は今年110周年を迎えることが出来ました。これもひとえに地域社会の皆様及び関係各位のお支えによるものと心よりの感謝を申し上げます。

創立時、戦前、戦中、戦後と幾多の困難を乗り越えていく中で、自ずと生まれた心がまえや理念が、学園を支える伝統となり、今に継承されています。そのいくつかをキーワードとして紹介いたします。

愛知淑徳が生まれた明治38年頃の高等女学校は、良妻賢母の育成が教育目標であり、家事や裁縫や修身が重んじられていましたが、愛知淑徳は、随意科目でもよい英語を必須科目としたり、理科を

重視するなど先進的教育をいたしました。反対する意見に対して、創立者小林清作先生は「将来の時勢を考え、十分に新しいことを教えて、10年先20年先になっても、決して時代に遅れるようなことの

ない人を作りたい」と理解を求めました。こうした時代の動向に敏感な進取の気象にあふれた精神は「伝統は、たちどまらない」今の学園の姿勢に貫かれています。

10年先20年先に役立つ人造り  
伝統は、たちどまらない



理事長 小林 素文

## 淑徳魂

「強さよやあしあし」

時代は昭和となり、数多くの愛校心あふれる同窓生からの寄付金が集まり、講堂の建設が計画されましたが、東新町校地が名古屋の中心地になってきたことから、地主が反対し、学校の早期立ち退きをも要求してきました。

学園は窮地に陥りましたが、「災いを転じて福となす」の決意で、昭和3年、池下に校地を購入し、同年夏休みの40日間で、教職員、生徒一同の協力の下、校舎を解体し、そのまま池下へ移築し、同年9月、新たな学び舎で始業式が行われました。そして、翌昭和4年、待望の講堂が完成いたしました。

こうした困難に際して「頑張る」精神を、創立者は『淑徳魂』と名付けました。今日では、これに建学以来の指導理念「陰徳」を加えて『淑徳魂』と呼んでいます。くじけず「頑張る」精神は「強さ」であり、人がみていようがまいが徳を施す「陰徳」は「やさ

しさ」です。「やさしいだけでは生きていけない、強いだけでは生きていく資格がない」と言われませんが、生徒・学生たちが「強さとやさしさを併せ持つ」素敵な人に成長されることを願っています。

## 淑徳晴れ

「天の深みへ夢かかげて」

昭和34年、愛知淑徳は学舎を池下から星が丘へ移転しました。名古屋駅―栄で開通していた地下鉄が東山まで延長されるに当たり、池下の校地が車庫用地となり、立ち退きを迫られたからです。

創立者の思いや生徒たちの思い出が詰まった池下を去り、当時、山と畑ばかりの星が丘へ移転することは、苦渋の選択であったと思われれます。が、創立者と同じく「災いを転じて福となす」の決意の下、中日新聞で「東洋一の高校校舎」と報じられる学舎が建つことになりました。

当時の校長小林素三郎先生の「何所よりも美しい情趣に満ちた

学園でありたい。如何なる制約もつけず、淑徳独自の教育をしていきたい」との思いを具現化すべく、3月31日、池下学舎に別れを告げ、全校生徒・教職員がそこから校旗を先頭に、星が丘にそびえる桜が丘学舎まで徒歩で行進をいたしました。その日は雲一つない上天気、校長先生は「これぞ淑徳晴れ」と青空に理想の教育の夢を馳せられました。

以来、学園祭や体育祭などで上天気の時、校長先生が『淑徳晴れ』と言うようになりました。天は無限です。『淑徳晴れ』とは、淑徳生よ、天の深みへ夢かかげて、凜として歩んでくれとの願いなのです。

## 違いを共に生きる

大学進学率が20%に近づくようになった昭和36年、学園は短期大学を創立し、総合学園の歩みを始めました。年々高まる愛知淑徳短期大学の名声を背景に、昭和50年、愛知淑徳大学が

創立されました。以来40年、大学は、大学院、クリニック、留学生別科を擁する8学部となり、学生数8000人を越える総合大学へと発展いたしました。大学の大きな節目は平成7年の男女共学体制への移行です。このことは、中日新聞一面トップで「愛知淑徳大学、男女共学へ」と報道され、大きな話題となりました。

大学を男女共学体制としたのは、グローバル化、情報化、高齢化が益々進展する21世紀を見据え「性別、国籍、世代、そして価値観の違いを越え、お互いの共通項にも目を向けながら、お互いが生かし生かされ合う存在であると認めて生きる」という理念を掲げたからです。

今日では障害者・健常者にも及ぶ、「違いを共に生きる」大学理念のもと、学生たちが、様々な人や文化や価値観に触れ、学び、切磋琢磨していき、思いやりがあり、たくましい社会人として羽ばたいていけることを願っています。